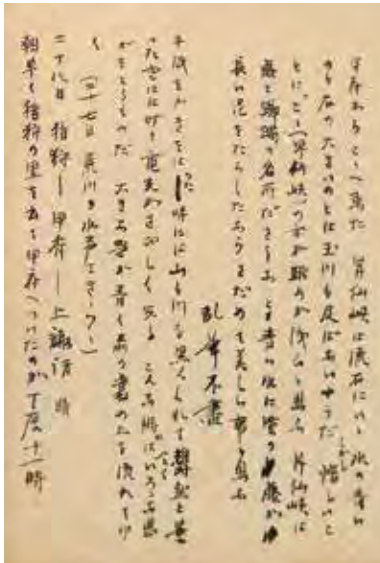


特設展

芥川龍之介 生誕130年

旅の記憶

展示資料より



「日誌」 芥川龍之介が東京府立第三中学校4年生・16歳の夏休みに毛筆で書いた日記

1908(明治41)年7月24日に友人の西川英次郎と東京を出発、26日に甲府に泊まり翌日に昇仙峡を訪れた。甲府から同級生の上滝寛(こうたきたかし)に手紙を出し、昇仙峡の眺めを称え「この青い水に紫の藤が長い花をたらしならさだめて美しい事と思ふ」と書いたことを記している。

中国を訪れた際に提供 日本近代文学館

1921(大正10)年3月から約4ヶ月にわたり、大阪毎日新聞社の海外視察員として、中国各地を訪問。帰国後「上海遊記」等を発表した。右は評論家の竹内逸。



そのことばのつづきへ



山梨県立文学館

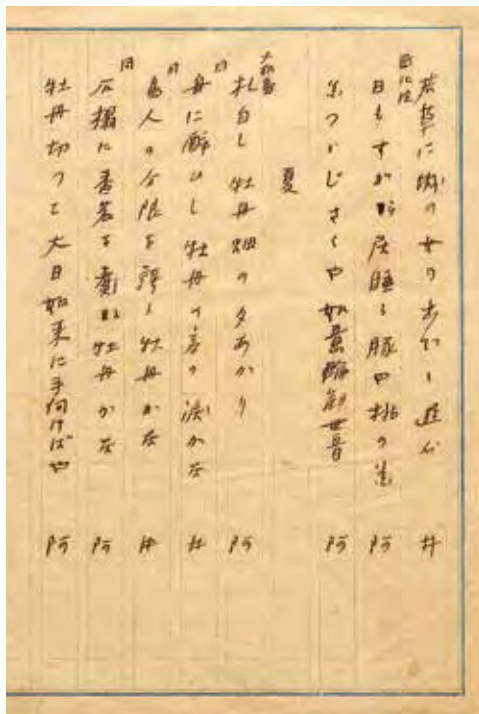
Yamanashi Prefectural Museum of Literature

芥川龍之介 生誕130年 旅の記憶

2022(令和4)年4月23日(土)~6月19日(日)

「羅生門」や「河童」など近代小説の名作で知られる芥川龍之介(1892~1927)は、旅が好きで、北は北海道から南は九州まで足を運んでいます。当時としては珍しく海外旅行も経験し、中国各地を訪れました。山梨・長野への徒歩旅行、失恋の傷を癒やした松江での日々、東北から北海道にかけての講演旅行など、各地での見聞は芥川の生活や作品に様々な影響を与えました。

当館の芥川コレクションを中心に、芥川の旅の軌跡をたどります。



初展示 芥川が書いた松江での見聞を読みこんだ俳句草稿
「井」は井川恭、「阿」は芥川の仕事。芥川は松江への旅によって再起し、帰京後、「羅生門」の執筆にとりかかった。



第一高等学校時代からの親友
井川恭いかわきょうが描いた出雲海岸の芥川
恒藤恭「旧友芥川龍之介」より
(1949年8月朝日新聞社)

1915(大正4)年夏、家族に反対されて吉田弥生との結婚をあきらめた芥川を慰めるため、井川が故郷の松江に芥川を招き、約3週間を共に過ごした。(井川は結婚して恒藤姓となった。)



初展示 1920(大正9)年8月、宮城県青根温泉の湯治場に約1ヶ月逗留した時の「御宿料記」
「御飯壺合 五銭二厘」「サイダー四本 壱円四十銭」など毎日の会計が記されている。滞在中「中央公論」9月号掲載のための原稿(「お律と子等」)執筆に励んだが、10月号に掲載となった。

芥川龍之介―手書きの文字が表現するもの

伊藤 一郎

文学館の展示を見るおもしろさはどんなところにあるのでしょうか。文学作品を読むのであれば、文庫本でも読むことができます。しかし、文学館では、作家自筆の原稿や創作メモなどが展示されています。千篇一律の活字とは異なり、それら筆跡からは書いた人の生身の息吹が感じられます。山梨県立文学館の芥川自筆資料を見るときの変った楽しみ方を提案してみたいと思います。それは、書道的視点です。一般的書道より少し範囲を広げ、手で文字を書くこと全般からの見方を書道的視点と考えてください。

いまは、ペン・インク・洋紙は身の周りに普通に存在しています。しかし、明治二十五年生まれの芥川の場合、そうではありませんでした。小学校の時は、毛筆が基本的筆記具だったようです。つまり、紙は和紙が使われることが多い。しかし、ペンとインクと洋紙がだんだん普及し、基本的筆記具になってきます。日本産の鉛筆が普及し、小学校で毛筆に替わるようになったのは大正時代に入ってからです。大正八年、文部大臣中橋徳五郎が学校での毛筆廃止の方針を打ち出し議論を呼びました。

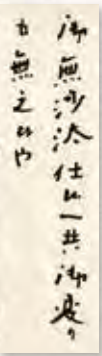
龍之介君の少年時代の日記や仲間と作った回覧雑誌などは、毛筆で書かれています。大学時代に講義を筆記したいわゆる大学ノートには、ペンとインクが使われています。時代の流れもありますが、いかにも上級学校という感じもしますね。年配の方なら、大学入学祝いに万年筆をもらった思い出があるでしょう。原稿の類はほとんどペンで書かれています。芥川は、万年筆には馴染まず、Gペンとインク壺を終生使用していたと言われています。Gペンはペン軸に差して使うものです。中に、推敲のために色鉛筆を使用したものが混じっています。大人になった芥川君にとって、日常的仕事である小説執筆を支えたのは西洋的近代の筆記具だったのです。

ところが、書簡の中には毛筆で巻紙に書いたものがあります。一種の美意識や、目上の方への敬意のためでしょう。いまでは失われた感覚ですね。例えば第一高等学校の恩師である齋藤阿具先生宛書簡「A」。丁寧な楷書の漢字が多く、連続せず一文字一文字がきちっと書かれています。それに対し、友人の池崎忠孝（赤木栢平）宛書簡「B」などは草書連綿体になっています。ハガキではペンもよく使われました。気軽な書きぶりですが、書体や用いられた筆記用具からうかがえます。美的工夫や遊びがある書簡か、連絡のための日常的書簡かで使い分けしている様子がうかがえます。

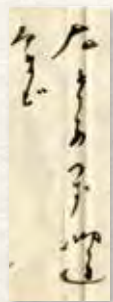
大正四年から九年ころの友人宛書簡には、宛名書きがゴツゴツと角張り至んだ書体で書かれたものがあります。私はそれを（六朝書体）と呼んでいます。中には、先記の池崎宛の封筒宛名書きのように、クネクネとした不思議な書体もあります。芥川の小説には多彩な文体が使われています。たとえば、江戸時代の候文で書かれた「尾形了齋覚え書」、キリシタン文献の文体が使われた「奉教人の死」など。これら文体の工夫が作品の大きな魅力となっているのです。それと同様に、書簡に多彩な書体を駆使し、受け取り手を魅了し楽しませようとする姿勢に、自分は彼の芸術的サービスピ精神を強く感じています。

短冊や色紙に書くときも毛筆です。文字の美的な表現を思ったとき、芥川の心に毛筆の書がまず浮かんでくるのでしょう。また、Gペンで書かれた原稿も子細に観察すると、若いころの元気な書きぶりや、自決直前の元気のないハエの頭のように小さな文字の違いが観察できます。つまり文学館は、丁寧に観察すると、新たな面白さや発見がいろいろとあるところなのです。

（東海大学名誉教授）



「A」大正三年十月九日付



「B」大正六年三月五日付

夏の特設展「文芸雑誌からZINEへ」

2022年7月16日(土)～8月28日(日)

小・中学校時代の芥川龍之介が友人とともに手書きで作った回覧雑誌や、太宰治が学生時代に仲間と発行した「細胞文藝」など、作家たちがみずから作品発表の場として発刊した文芸雑誌があります。一方、現代では若年層を中心に、テーマや表現方法など自由に構成する「ZINE」の創作が、世界各地に広がっています。近代文学を彩ってきた文芸雑誌や、進化を続ける「ZINE」の現状を紹介、表現のあり方をさぐります。



「小さな本一 ZINE作り教室」
(当館で2021年11月13日に開催)で
作成したZINE



「細胞文藝」創刊号
1928(昭和3)年5月
太宰が弘前高等学校時代に
編集発行した同人誌。

常設展

第1室～第4室(展示室A)

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの一部資料の展示替えとともに、第1室で期間限定展示を次のとおり行います。

春の常設展

3月8日(火)
～6月5日(日)
山梨の現代作家
保坂和志



夏・秋の常設展

6月7日(火)
～11月30日(水)
山梨の芥川賞・
直木賞作家



直木賞正賞の懐中時計
LONGINES製
木々高太郎旧蔵

第5室(展示室B)

山梨出身・ゆかりの文学者104名を2期に分けて展示しています。

小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡
4月5日(火)～7月3日(日)

※第5室は、7月5日(火)から8月28日(日)まで休室します。

イベントガイド

特設展「芥川龍之介 生誕130年 旅の記憶」関連イベント

参加無料(ワークショップのみ材料費500円が必要です) 要申込

講演会「芥川龍之介の講演旅行-紀行文「東北・北海道・新潟」をめぐって」

5月21日(土) 午後1時30分～午後3時

講師: 庄司達也(横浜市立大学教授)

会場: 講堂 定員: 150名

申し込み方法: 4月23日(土)より電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

年間文学講座2「芥川龍之介による切支丹物」

6月4日(土) 午後2時～午後3時30分

講師: 大村梓(山梨県立大学准教授)

会場: 研修室 定員: 40名

申し込み方法: 5月21日(土)より電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

映画会「羅生門」 原作:芥川龍之介 監督:黒澤明

出演: 三船敏郎、森雅之、京マチ子 他 1950年 大映 モノクロ 88分

6月5日(日) 午後1時30分～

会場: 講堂 定員: 150名

申し込み方法: 5月22日(日)より電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

ワークショップ「消しゴムはんこで“河童”を描こう!」

5月29日(日) 午前10時～午前11時30分 午後2時～午後3時30分

講師: アオヤギルミ(消しゴムはんこ作家)

会場: 研修室 定員: 小学校4年生以上 午前・午後各15名 材料費: 500円

申し込み方法: 4月26日(火)より電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

三枝浩樹 初心者短歌教室

歌人の三枝浩樹氏による講義、実作指導。2回出席できる方、お申し込みください。

5月28日(土) 午後1時30分～午後2時40分

6月18日(土) 午後1時30分～午後3時

会場: 研修室 定員: 20名 参加無料



※要申込

申込方法
*往復はがきでお申し込み下さい。1枚で1人までご応募いただけます。締切5月10日(火)必着
往信欄裏面に①郵便番号、②住所、③氏名・ふりがな、④電話番号、
返信欄表面に①郵便番号、②住所、③氏名をご記入のうえ当館までお申し込みください。
*申し込み多数の場合は、抽選のうえ結果を1週間前頃までにお送りします。

年間文学講座

講座1「『源氏物語』入門—“若い”光源氏を描く巻々—」

講師：池田尚隆（元山梨大学教授）

4月22日（金） 「桐壺」巻

7月15日（金） 「若紫」巻

5月20日（金） 「帚木」「空蟬」巻

8月19日（金） 「末摘花」巻

6月17日（金） 「夕顔」巻

講座2「ジャンルを超える文学の可能性2」

講師：大村梓（山梨県立大学准教授）

4月16日（土） 文学作品に描かれる都市—川端康成『浅草紅団』

5月14日（土） 洋装と和装の人々—幸田文『流れる』、谷崎潤一郎『細雪』

6月 4日（土） 芥川龍之介による切支丹物

7月 2日（土） 異国から日本を描く—カズオ・イシグロ

8月 6日（土） フランスかぶれの日本人たち—与謝野晶子の時代から現代まで

＊講座1・2とも午後2時～ 会場：研修室 定員：40名 参加無料

＊開催日の2週間前から電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

名作映画鑑賞会

6月 5日（日） 「羅生門」 監督 黒澤明 1950年 大映 88分

8月21日（日） 「若おかみは小学生」 監督 高坂希太郎 2018年 ギャガ 94分

＊いずれも午後1時30分～ 会場 講堂 定員150名 参加無料

＊「羅生門」は5月22日（日）から、「若おかみは小学生」は8月7日（日）から電話でお申し込みください。
先着順で定員になり次第締切となります。

読書会

5月 8日（日） 深沢七郎「楢山節考」

6月12日（日） 山本周五郎「山彦乙女」

＊いずれも午前10時～ 会場：研修室

＊読書会の年間予定はチラシまたは4月以降の当館ホームページをご覧ください。
電話かかがき（氏名・電話番号明記）で協会事務局までお申し込みください。

新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、各イベントを延期（または中止）する場合があります。また、内容を変更、入場制限をする場合もございます。予めご了承ください。ご来館前に当館ホームページを必ずご確認ください。

閲覧室

閲覧室では、ご来館いただいた方に、より当館の資料に親しんでいただくため、所蔵している図書、雑誌を紹介する展示を定期的に行っています。企画展・特設展と連動した展示のほか、山梨出身・ゆかりの文学者を紹介する展示や季節にちなんだ展示も行っています。展示資料は直接手に取ってご覧いただけます。

入場無料



閲覧室資料紹介

「芥川龍之介再発見」 4月23日(土)～6月19日(日)

「文芸誌・同人誌いろいろ」 7月16日(土)～8月28日(日)

山梨の文学者 資料紹介

「文学者が描く武田信玄と武田家」 4月6日(水)～4月21日(木)

「鳴山草平 生誕120年・没後50年」 6月22日(水)～7月14日(木)

寄贈資料より

(令和3年8月～令和4年1月)

- 川島幸希氏より芥川龍之介「松江連句」未定稿1点、雑誌1点
- 備仲臣道氏より「聴講者感銘を深める 郷土出身山田先生他二氏を迎えて」切り抜きコピーなど2点、図書1点、雑誌1点
- 寺内敏夫氏より檀一雄「石川淳氏の季節「鳴神」について」原稿など3点
- 富田宣夫氏より青木月斗「雪の住ひを霞に速くしぬひけり」短冊など24点
- 赤池宏己氏より「銀ぎつね」(田村修宏 著 第29回やまなし文学賞小説部門受賞作)挿絵28点
- 内海仁美氏より「河童のいた日々」(第29回やまなし文学賞小説部門佳作)挿絵原画5点
- 横森秀彦氏より「カップ酒」(第29回やまなし文学賞小説部門佳作)挿絵原画27点
- 秋元千恵子氏より玉城徹「男鹿の海の鯛のうしほの大き椀めかぶのぬめり著にひきつつ」軸装など19点、図書1点
- 佐野秀延氏より結城昌治書簡1点、図書1点、雑誌16点、新聞1点
- 宗田裕子氏より飯田龍太「句集遅速」原稿コピーなど特殊資料9点、図書1点

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

相川健	内海宏隆	岸本尚毅	齋藤喜美子	戸川安宣	秦恒平	松本章男	山本育夫
相澤正城	大野とくよ	北川尚代	三枝稔	長岡千波	林真理子	溝口克己	吉濱みち子
浅川雅紀	大村益夫	橋田活子	沙羅樹	中嶋淑人	原國人	向山建生	吉村登
石田順朗	香川雅子	栗原敦	沢登清一郎	中村吾郎	廣瀬妙子	向山三樹	
一瀬公弘	角川春樹	こまつかん	清水妙子	西田耕三	藤田男久子	矢羽勝幸	
上野艶子	川俣正英	小山弘明	塚本洋子	濃野初美	麻郷地一則	山下健市	

この他に団体の方々からもご寄贈いただいております。

ご案内

Information

内容が変更になる場合がございます。ご来館前に当館ホームページを必ずご覧ください。

開館時間

展示室	午前9時～午後5時 (入室は午後4時30分まで)
閲覧室	午前9時～午後7時 (土・日・祝は午後6時まで)
ミュージアム ショップ	午前9時30分～午後4時20分
カフェ	午前9時30分～午後5時 (オーダーストップ午後4時30分)

*営業時間は変更になる場合があります。

休館日(4～9月)

4月	4・11・18・25日
5月	9・16・23・30日
6月	6・13・20・27日
7月	4・11・19・25日
8月	1・8・22・29日
9月	5・12・26日

展示室観覧料

	常設展(特設展)		美術館との 共通券	企画展		常設展と企画展の セット券
	個人	団体 (20名以上)		個人	団体	
一般	330円	260円	680円	600円	480円	740円
大学生	220円	170円	340円	400円	320円	490円

*高校生以下の児童・生徒、65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方、およびその介護をされる方は無料です。

*団体料金は20名様以上の団体、前売券、県内宿泊者割引適用。

*特設展は、常設展観覧料でご覧いただけます。

施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- お申込みは開館日の9:00より先着順で受け付けます。文学館チケット売場まで申請者様の印鑑をお持ちのうえ、お越しください。受付時間は9:00～16:30です。
- いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意はお申込みの際、ご説明いたします。

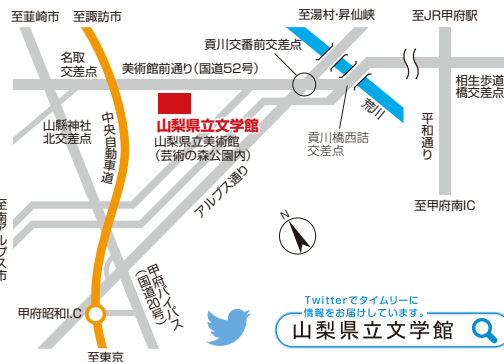
交通のご案内

中央自動車道甲府昭和インターチェンジより

- 料金所を昇仙峡・湯村方面へ出て200m先を左折、西条北交差点左折、アルプス通りを約2km直進、貢川交番前交差点を左折、国道52号を約1km左側。

JR中央本線甲府駅より

- 甲府駅バスターミナル(南口)1番乗り場より御勅使・竜王駅 経由 敷島営業所・大草經由葦崎駅・貢川団地各行きバスで約15分「山梨県立美術館」下車。
※甲府駅からのバスの時刻表は(山梨交通HP)よりお調べいただけます。
- タクシーで約15分。



Twitterでタイムリーに
情報をお届けしています。

山梨県立文学館



@yamanashi_art_literature_park

そのことばのつづきへ



山梨県立文学館

Yamanashi Prefectural Museum of Literature

〒400-0065 山梨県甲府市貢川1-5-35
TEL:055-235-8080 FAX:055-226-9032
https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/

ホームページ

